



MY
ACTION

Vol. 09

その笑顔にたどり着くまで

佐々木 恭子

フジテレビアナウンサー

SASAKI KYOKO



©フジテレビ

PROFILE

1972年兵庫県出身。1996年(株)フジテレビジョン入社。『情報プレゼンター とくダネ!』(99年4月～2009年3月)などでキャスターを務める。現在産休中。05～08年にかけて、インドネシア、マラウイ、パプアニューギニア、ガイアナを取材し、全国で報告会を実施。著書に『それでも、笑顔で生きていく。～私が出会ったHIV/エイズの子どもたち～』(扶桑社)。
★この本を1人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ

FNSチャリティーキャンペーンの一環として、2005年スマトラ沖地震の半年後にインドネシアのバンダアチエを訪れました。本当に何もなく、一瞬でこんなふうになってしまうんだと…。初めて原爆ドームを見たときのような衝撃でした。でもそこには、家族を失っても、貧しくても、懸命に生きる人々の姿がありました。お客さんだからと言って、私たちに食事をふるまってくれたり、「こんな時でも人を気遣うことができるなんて」と、胸がいっぱいになりました。

06年からは、HIV/エイズをテーマに、マラウイ、パプアニューギニア、ガイアナを取材しました。必要最低限の医療ですら整備されておらず、もはや自分たちの力だけでは感染をコントロールできない状態。「人の死」が、あまりに身近に、たくさんあることがとてもショックでした。

それでもみんな明るくて、たくましいんです。助け合いながら、一生懸命生きてる。日本では感じたことのない、「人間同士のつながり」の深さを感じました。弟や妹の世話のために学校に行けなくても、「この子たちのために頑張るんだ」って。私は、これまで人のために生きるなんて考えたことがあったかと…。

一方で、そんな彼らのまぶしい笑顔が、悲しみとの合わせ鏡であるように思えてなりません。その笑顔にたどり着くまでは、本当に、本当に大変だったんだと思います。私は、彼らのためにも「伝え手」として、目に見えるものだけでなくその一歩奥にあるものを感じて、皆さんに伝えていくことが使命だと考えています。

マラウイでは、現場で奮闘している青年海外協力隊の活動も視察しました。そして、孤児院で活動する隊員

の言葉を聞いてはっとしました。

「まずは“そばにいる”ことが大切。一緒に遊んだり、話を聞いてあげたり。それだけでも違うんです」

彼らが自立していくためには、技術だけでなく、本当に長い目で、ゆっくとその国に根差した支援を行っていくことが大切なんです。

どんな人でも、身近でできることはたくさんあると思います。ニュースを見て、途上国について関心を持つことから始めてもいい。フェアトレードショップに、ちょっと足を運んでみるのもいい。でも若い人には、思い切って外に飛び出してほしい。言葉だけでなく、肌で現実を感じることも大切だから。

私たち一人一人が、遠い国で起こっていること、そこで懸命に生きる人たちに思いをはせれば、世界は変わっていくのではないのでしょうか。

※このインタビューは、2009年3月に行われたものです。